体育の授業

ところ変われば、品変わる。同じ体育の授業といっても、国により、ところによって趣が異なる。いろいろな国で生活してきた海外帰国生の、体育の授業についての報告を読んだ。

インドネシアの国際学校での体験。授業が始まると、好きなところに集まるようにと先生が言う。驚いた。トランポリン、跳び箱、球技、何でもよい。集まったら少人数で真剣に練習する。慣れたら楽しくなった。

オーストラリアの中学では季節ごとにスポーツが変わり、何にでも挑戦できる。強制がない。米国の体育も似ている。「娘は体育が苦手なのだが」と両親が先生に相談した。不得意なものがあってよい、今は、一生やれそうなものを見つけるために、いろいろなスポーツを、という返事だった。

ブラジル、ルクセンブルクなどでの体験は興味深い。バスケットボールやサッカーの試合で長途の遠征に出る。いずれも、先方の学校の子供の家に泊まる。ルクセンブルクの場合、旅券を持った小学生たちだけの外国遠征だ。「おかげで、様々な人々と知り合えた上、言語も覚えました」。

日本でも、もっと実用的なことを教えたらどうか、という感想が多い。バーレーンでの着衣のままの水泳練習。スイスでも着衣水泳のほか、長時間水泳や人命救助を習った。米国での救助訓練では、ズボンを浮袋に利用することも覚えた。米国には、女性の護身の勉強もある。

社交ダンスを学ばせるのは、ドイツ、カナダの中学だ。楽しかった。カナダから帰った女子生徒は、なぜダンスを教えるのだろうか、と考える。社会での付き合いの仕方に即している、そして自然な男女交際を教えようとしたのだ……。

様々な体験を「子どもが見た世界の体育授業」という本にまとめた国際基督教大学高校の和田雅史教諭は、画一的、保守的な日本の体育授業に参考になる、と言っている。